

数種昆虫病原糸状菌のコスカシバ幼虫に対する病原性

福島県蚕業試験場養蚕部
平成12～13年度福島蚕試年報

1 部門名

蚕糸-病害虫-病害虫防除
分類コード09-03-23000000

2 担当者

松木伸浩・三田村敏正

3 要旨

福島県ではモモ用複合交信攪乱剤を利用した殺虫剤削減防除体系を普及化しているが、近年、交信攪乱対象外の害虫のうちコスカシバ (*Synanthedon Hector*) 幼虫の食入被害が多発傾向にある。そこで、昆虫病原糸状菌によるコスカシバ防除法の確立を目指し、幼虫に対し病原性のある糸状菌の検索を行った。

供試菌株は、当场において分離した昆虫病原糸状菌12株を用いた。コスカシバ幼虫は、1999年12月福島県桑折町のモモ園において採集し供試した。各供試菌株分生子を 4×10^8 個/mlに調製し、コスカシバ幼虫を約5秒間浸せきした。15日目と30日目に死亡の有無および菌糸の叢生を観察した。その結果、コスカシバ幼虫に対して *Beauveria bassiana* Ac1株 (分離源：フキバッタ類) および *brongniartii* Pj2-2株 (分離源：ツノアオカメムシ) 等が強い病原性を示した。

これらの菌株を用いて、2000年10月中旬に福島県桑折町において、モモ主幹の幼虫生息部位に分生子浮遊液 (4×10^8 個/ml) 1mlをピペットで滴下した。2001年2月中旬に幼虫の生死を調査した結果、対照区では供試部位数5～7箇所中ほとんどすべての幼虫が生息していたのに対し、分生子散布区では生存幼虫数1、2頭であった。

また、2001年5月中旬に、モモ主幹部に分生子浮遊液100mlをハンドスプレーを用い散布し、2001年11月上旬に蛹殻数を調査したところ、すべての分生子散布区で蛹殻は認められなかった。

以上のことから、これらの糸状菌株を用いたモモほ場におけるコスカシバ幼虫防除は、有効であると考えられた。

4 その他の資料等

松木伸浩・三田村敏正・荒川昭弘(2002):第46回日本応用動物昆虫学会大会講演要旨.